

小豆粥世にも齢にも逆らはず

ツル子

【鑑賞】 互選で最も人気の高かった句であるが、「・・・にも・・・にも」の並列の句である。並列の句立ては散漫になり易いので、一般論として、基本的に避けた方がよい。「世に逆らわず」は、恬淡とした現在の心境を述べたものであろうが、年齢と並列に述べられると、収まりの良すぎる句になる。流れた句になる。

一般的な心境吐露から云えば、年齢に逆らわずとすれば、我が子を始めとする「世」に逆らわずということも言っているのではないか。とすれば、対象を歳(よはひ)に絞り込み、「小豆粥己が齢に逆らわず」とすることができる。

単線の北風吹く駅の時刻表

ツル子

【鑑賞】 これも互選で人気の高かった句であるが、「無人駅」とか「単線」は、いわゆる俳句的寂寥感を出すためによく使われる言葉である。それだけに既視感は否めない。北風の吹きすさぶ駅のホームで時おり時刻表を見ながら電車の到着を待っているのであらうから、「電車待つ北風吹く駅の時刻表」とすることもできる。単線の駅の風景を淡々と描写する代わりに、作者の存在を前面に出したものである。

どの背ナも語部たらむ日向ぼこ

才美

【鑑賞】 語部を持つてきたのが良い。語らいの中にこそ本当の人間的な交流が始まる。

薄氷や消え入りさうな昼の月

弘子

【鑑賞】 「薄くなる」と「消え入る」とでは、ともに「滅殺する」点において、同じような事柄を並べただけである。微妙なところを衝いた句であり、「氷」と「月」との配合には一定の効果はある。しかし、「滅殺していく」という意味を含まない言葉と突き合わせた方がよい。例えば、「水仙や消え入りさうな昼の月」とするのである。生命感にあふれた水仙の黄の花との対比である。

山間の長寿の里なり凧二つ

幸

【鑑賞】 長寿の里と凧との配合が良い。凧二つとすることによって、お年寄りだけでなく、凧揚げに遊び興ずる子供達の存在を窺い知ることができる。世代構成に騙りのない集落の頼もしさが感じ取れる。

駐輪の列の乱れし雪の街

明美

【鑑賞】 雪が降り積もった街では、瑣末な夾雑物は雪の下に隠されてしまう。雪面による浄化作用とでも言うべきものか。にもかかわらず作者の目には乱雑に駐輪された自転車の列が飛び込んで来る。乱雑な駐輪の列は静謐な雪景色故に目立つ。共同の生活空間を大事にしようとしなない人達への怒りが感じられる。

中吉のみくじ結ぶや小正月

ツル子

【鑑賞】 小正月に中吉の御籤は過不足のない配合である。

あいさつの幼なの眼線実千両

秀一

【鑑賞】 挨拶のお辞儀をする子供の目線に実千両が入ったとの句である。千両の高さと幼い訪問客の背丈を良く観察した句である。

雪催いつしか一人ひとりかな

守

【自解】 人間は一人で生まれ、最後まで一人で死んでいくものである。

百人に百の個人史寒椿

守

【自解】 億の人間がいても一人ずつ違う生き様を持ち、様々な生の履歴を抱えている。

初夢か尾の先動く眠り猫

友子

【鑑賞】 猫も夢を見ることを前提とした句である。猫の尾の動きに注目したのは面白い。

謹んで先輩句集読初し

邦子

【鑑賞】 秀一さんの第一句集上梓への挨拶句である。「謹んで」は「謹みて」とした
い。

梯子乗バックは地上五十階

守

【自解】 出初式を見学したときの違和感である。火消しが乗る梯子の先端は、バックにある高層マンションの下五分の一に届く程度である。梯子車や高圧ポンプ、各階のスプリンクラーの技術改良はあるもの、いざという非常時に的確に本当に機能するものかどうか不安である。

北風を唄はせてゐし雑木山

才美

【鑑賞】 北風が音を立てて雑木林を吹き抜けている。その風の唸りを唄と捉え、しかも雑木山が唄わせていると捉えている。いわゆる擬人化の句は、対象物に対する作者独自の見立てや把握を披瀝するものである。そこには一定の面白さはあるが、効果は限定的で矢張り弱い。

御降りのふはりと髪を浄めけり

友子

【鑑賞】 「御降り」に対して「浄める」との配置は、もっともではあるが、予定調和的である。ここは極自然に、「髪に当たりけり」で良いのではないか。

悴みし手にオルゴール巻き直す 明美

【鑑賞】 オルゴールのゼンマイを巻いている。しかも悴んだ手で巻いている。そのオルゴールが作者にとって想い出深いものであることが、ひしひしと感ぜられる。

三日はや散歩開始や昼の月 友子

【添削】 三日はや散歩の歩幅昼の月

一月三日に散歩を開始したときに昼の月を見たという報告の句である。「昼の月」が効いていない。散歩を日課としている人ならば、元日も二日も散歩に行ったのではないか。

大寒や写経の小筆賜はるる 秀一

【鑑賞】 寒気が極限に達する時期に写経の会に参加した。その大寺における写経の緊張感は、役僧から一本の小筆を託されたときに高まる。

友去りて空ろの心寒きびし ヤエ子

【添削】 人去りし虚ろのこころ寒き夜。

常日頃何でも話し合えた友人が転居されて行ったとのこと。心情の良く分かる句である。一般論として、「友」という言葉を使うと、句が情緒に流れ易い。

日脚伸び古りし茶の間の掛時計 弘子

【感想】 良く分かる句であるが、予定調和的である。

古九谷の藍色深き冬座敷

幸

【感想】 古九谷と冬座敷の取り合わせは常套的である。

買初や十億円の宝くじ

ヤエ子

【鑑賞】 肩の張らない軽み志向の句である。くじの抽選結果や如何に。

バス見えぬ五分遅れの雪催

ツル子

【添削】 雪催五分遅れのバスの屋根

定刻より五分遅れてバスが到着したのである。バスの全体が見えると言うよりも、その一部の屋根が見えて来たとした方が、じりじりしながらバスの到着を待っている客の感じが出る。

枯芝や時をたがへて猫雀

秀一

【鑑賞】 よく俳句は出会い頭の瞬間を詠めと言われているが、これは一般論である。作者は堂々と、「時をたがへて」と言っている。異なる時点において同じ枯芝の上で猫と雀を見たと言っている。

寒昴銃持つ手にはペン持てぬ

才美

【鑑賞】 最近の独善的な狂気が横行する世界へのプロテストである。「銃」と「ペン」を対置し、「持つ」のリフレインで繋げたものである。これはこれで良いが、「銃棄ててペンを持てよと寒昴」とすることもできる。

くもり日に色出し初めしエリカかな ヤエ子

【添削】 薄ぐもり色出し初めしエリカかな

説明的になり易い「に」は使わない方が良い。

冬銀河言葉の狂ひ尾を曳けり 幸

【添削】 凍星や尾曳く言葉の行き違ひ

星の集団としての「冬銀河」は使用せず、孤立性のある「凍星」にした方が良い。

せりなずな嬰の笑ひて齒の二本 才美

【添削】 七日粥嬰の笑ひて齒の二本

不意に来しなべやきうどんなら出来る 弘

【添削】 不意の客なべ焼うどんなら出来る

鉢に生ふ食してみたし冬草や ヤエ

【添削】 どこよりの冬草鉢に食みてみむ

富士そびゆ坂のてつぺん寒日和 弘子

【添削】 富士見坂登る天辺寒日和

晴るる日の仏正月街静か 邦子

【添削】 晴るる日の仏正月海たひら

読み棄ての勿体なきかな年賀状 邦子

【添削】 年賀状一言半句のその奥に

好き嫌ひの多き児ごまめ類ばりぬ 友子

【添削】 好き嫌ひありし少年ごまめ食む

冬麗たまにはいいか一人旅 才美

【添削】 冬麗や自ら許す一人旅

何年も喪中葉書が続く友 眞壽

【添削】 何年の喪中葉書や賀状来る

冬鳥の来て養鶏の声なき死 明美

【添削】 春近し養鶏場の声なき死

西日本・九州によく襲来する鳥インフルエンザである。罹患した地域の養鶏場に飼われている鶏は一見健康そうなものも防疫のため全数が殺処分される。鶏のみならず養鶏業者の悲痛な呻き声が聞こえる。ただ、鳥類の養鶏に冬鳥を配合しているが、これは避けた方が良い。養鶏場としたのは、鶏と養鶏場経営者の双方を含める意である。

見せかけて雪にはならず空の色 弘子

【添削】 見せかけの空一片の雪もなく

いつからか我家に根付く恵方巻 眞壽

【添削】 いつからの我家の習ひ恵方巻き